

目的 青春期女子短大生(20才) 100名それぞれの食味嗜好性が、15年後、35才の壮年期に達する間に、どのような加齢にともなう変化を生じたかを追跡的に調査推計した。

方法 被検者100名につき、甘、酸、塩味食品それぞれの食味イメージ調査および食味嗜好調査を実施し、以後、5、10、15年ごとに同調査を追跡的に行った。調査解析にあたっては、演者ら提案の「食味嗜好指数」を適用した。すなわち、甘、酸、塩味食品に対する各嗜好度を調べ、これによる味間の嗜好度の比(嗜好比)に基づき、「嗜好指数」を算出して、年次別の統計解析に供した。

結果

- 1) 本パネルでは、20才から35才に至る15年間に、甘味嗜好から酸・塩味嗜好への大幅な嗜好変化が認められた。
- 2) 一方、この追跡期間中に食生活意識の社会的変容等により、各食品とも成分組成に若干の変化を来しており、被検者の食味イメージにもかなりの変化が認められた。
- 3) したがって、食品成分中呈味成分および食味イメージにつき検討を加えた結果、上記1)の嗜好変化は、食品組成の変化のほか、食意識の変化および特に生理的味覚変化が原因して生じているものと推定された。
- 4) なお、酸味、塩味はともに甘味への対抗食味として嗜好上の類似性を持っている。
- 5) 青春期に(甘味に比して)酸味嗜好の強い者は、後年、塩味を好む「から党」に変容する。